



人肉強盗団 前編

奴らの狙いは大量の現金と
美女の極上生肉

作者 大黒達也

『人肉強盗団 前編』

作者 大黒達也

一・あらすじ

完全武装した銀行強盗団が、新宿にある都銀を襲撃した。軍隊同様の装備を有する彼らの前に警察は為すすべが無く、十億円の現金と数名の人質を奪われる。

人質は皆、容貌肢体が整った美女達で、全裸にされ何処へとも無く連れ去られる。

彼らに果敢に立ち向かうのは、警視庁に特設された特別対策室のメンバーである。メンバーは皆女性で、彼女達を率いるのは警視庁きっての美女であり、凄腕を誇る工藤真弓であった。謎の銀行強盗団と警視庁の「アマゾネス軍団」によって、東京を主要舞台として戦

闘が繰り広げられる。彼らの正体は、またその真の目的は何なのか……。。

二・登場人物

工藤 真弓

くどう

まゆみ

警視庁公安部外事一課警視、警視庁一の美しい容貌
肢体を持ち、テロリストを単身で殲滅させる凄腕の持

ち主

後藤 瞳

ごとう

ひとみ

警視庁公安部公安課警部、顔立ちも目鼻立ちがくつきりとした美人。数か国語の外国語をマスターしている。
る。

白石 しらいし
美由紀 みゆき

警視庁航空隊所属役職は警部、ヘリの操縦にかけては警視庁内で並ぶものがない。

木下 きのした
真理子 まりこ

警視庁科学調査課警部、格闘術が得意であり、真弓と互角の勝負ができる警視庁唯一の女性だった。

少佐 しょうさ

謎の銀行強盗団の首領、強力無比な戦闘能力を有する

アリサ

謎の銀行強盗団の女戦士、残虐な性格と美貌の持ち

主

三・ 目次

第一章 強奪

第二章 真弓

第三章 逆襲

『本編』

第一章 強奪

新宿歌舞伎町の東側、通称、明治通り、に面した大手都市銀行前に、黒塗りのバンが音もなく停車した。後部ドアが開き、中から七人の男達が現れた。皆、レイバンのサングラスをかけ、迷彩服に身を包み、自動小銃や軽機関銃を抱えていた。道を行く通行人達の足が止まった。直ぐに彼らのまわりに人だかりができた。

「何かのロケか？」

人々の間にざわめきが広がっていく。男達のうち二人は白人で雲を突くような大男だった。全員男に見えるが一人は女のような。屈強な男達の中で、ただ一人華奢な肢体を持っていた。長い髪を後ろに束ね赤いバ

ンダナを巻いていた。男達の一人が、空を仰ぎ、降り注ぐ真夏の太陽をサングラス越しにじっと見つめた。サングラスのせいで表情はようとして掴めない。空を見上げた男が、腕時計に視線を落とした。

「時間だ」

彼らはゆっくりと銀行のドアをめざし歩き始めた。

銀行のドアが開き、二名のガードマンが走り出てきた。

「こんなところで、ロケ等されては困るんだ。許可は取ってあるのか？」

それには答えず、女が突然、自動小銃M一六Aニを二人のガードマンに向けた。

「冗談はよせ……」

ガードマンの声はM一六Aニの「ダダダダ……」

という連射音にかき消された。二人の身体は至近距離からの五・五六ミリ×四五弾の連射によってずたずたに引き裂かれた。銃声が止んだときには、インターロッキングの歩道に倒れ伏していた。背中にはゴルフボール大の射出口がいくつも穿たれていた。二人の身体を貫通した弾丸は銀行のガラスドアを粉々に砕いていた。通行人達はガードマンの死体と、破碎したガラスドアを交互に見つめていた。

「本、本物だ！」

誰かが叫んだ。群衆に衝撃が走り、一斉に走り出した。車道に走り出て車にひかれる者や倒れた者を踏みつけていく者。パニックが人々を支配していた。武装集団のまわりに人影は無くなった。彼らは何事も無か

ったように歩き出した。破砕したガラスドアを抜け、銀行内に入った。中では二十名ほどの行員達が呆然とした表情で立ちすくんでいた。十人ほどの客がいた。客達は床に伏せて頭を抱えている者、ソファに坐ったまま宙を見つめている者等様々だった。

武装集団は行員達に対峙して一列に並んだ。大男のうちの一人が軽機関銃を天井に向けて連射した。「ダダダダダ」という銃声とともに天井から小さな石膏ボードの欠片が落ち、硝煙が銀行内に立ちこめた。男達の中央にいた一人が片腕を上げた。銃声が止んだ。女子行員があげるすすり泣き以外何も聞こえなかった。片腕を上げた男は、首謀格らしく落ち着いた表情をしていた。短く刈り上げた髪型で、浅黒く引き締ま

った顔立ちをしていた。身長は百八十五センチメートル程でがっちり引き締まった筋肉質の体型をしていた。武装も他の者達よりは軽装で、ウーヂサブマシンガンを肩に掛けている程度だ。男が口を開いた。

「この銀行は我々が占領した。代表者は十秒以内に出てくるように」

店の奥から初老の男がゆっくりとした足取りで出てきた。

「……支店長の大隅です。……どうか手荒な真似は止めて下さい」

首謀格の男が、仲間の一人に目で合図を送った。

迷彩服に重武装し、身長百七十センチメートルで豊かな肢体を持つ女が前に出て、窓口にいた女子行員を

カウンター越に引きずり出した。

震えて泣き叫ぶ女子行員の前身をカウンターに伏せさせ、片手で、背中に組ませた両手を掴んで押しつけた。もう一方の手で女子行員のパンテイストツキングを力まかせにむしり取った。むっちりとした尻の膨らみを白色のパンティが覆っていた。

女はパンティをゆっくりとおろしていった。剥きタマゴのような白い尻が丸見えになった。女は舌なめずりをしながら、片手で尻を撫で回した。膣口に指を根元まで差込掻き回した。その女子行員の背後で膝を着き、白い尻の割れ目に顔を押し付け、音を立てて肛門を舐り始めた。

そして、腰のホルスターから自動拳銃を引き抜き、



銃口を女の剥き出しになったアヌスに当てた。デザイ
トイーグル三五七マグナムだ。装弾数九発、対人用と
しては威力がありすぎる。女が口を開いた。妙に高い
トーンだった。

「十秒やるから、金の在処に案内しな。言うことを聞
かないと、この女の尻は吹っ飛ぶことになるよ」

「……」

「一、二、三」



突然「ダーン」という乾いた銃声がして、女子行員の身体が一瞬逆海老剃りになり、カウンターに突っ伏した。身体は小刻みに痙攣し、太腿から真っ赤な鮮血

が滴り落ちた。

「しまった。指がすべっちゃまった」

女が放った銃弾は女子行員のアヌスを抜け、内臓を破壊していた。女が女子行員の背中に組ませた腕を放すと、床にゆっくりと倒れ伏した。既に絶命していた。支店長の大隅がその場にへたりこんだ。

「わ、わ、わかりました。金は地下金庫の中です」

首謀格の男が、顎の先で先ほどの男に合図を送った。男はそれを受けて、カウンターを飛び越え、支店長に近付いた。

「さっさと立ち上がれ。この糞爺！」

男が支店長の大隅を汚く罵った。大隅はふらふらと立ち上がった。身体中の震えを隠すことができなかつ

た。

「金の場所に案内するんだ」

大隅と男は奥に向かって歩き始めた。その時、複数のパトカーのサイレンが、聞こえてきた。音は銀行を指しているように刻一刻と大きくなっていく。首謀格の男が、白人の大男に向かって命令した。

「片づけろ」

大男はもう一人の白人の大男に目で合図し、二人で行内から出ていった。二人は銀行の前で立ち止まった。数十台のパトカー集団は、銀行から百メートルのところまで接近していた。一人が、肩から下げたDVDプレーヤーのスイッチを押した。七十年代に流行ったハードロックがけたたましく流れ出した。

もう一人はガムを噛みながら、抱えていたFN M
ニ四九ミニミ機関銃を先頭車に向け、引き金を引き絞
った。「ダダダダダダ」という連射音とともに先頭車
のフロントガラス、ボンネットが打ち抜かれた。先頭
車は横向きになり横転し、そこに後続車がフルスピー
ドで突っ込んだ。ドーンという衝撃音とともに爆発炎
上した。続く数十台のパトカーが道を塞がれ立ち往生
した。

「やたっぜ」

「最高だな」

DVDプレイヤーを持っていた男は肩に掛けてい
た六連発の南アフリカ製四十ミリグレナードランチ
ヤーMGLを後続車に向けて連続的に発射した。「ボ

ーン、ポーン、ポーン」という爆撃音がして、数台の
パトカーが吹き飛んだ。

「死ぬ。皆死んじまえ！」

生存者達が、火だるまとなって路上に飛び出した。
機関銃が火を噴き容赦無く、銃弾を犠牲者に撃ち込ん
でいく。四十ミリグレナードランチャーを発射してい
た男も、機関銃に切り替えた。二丁の銃口から吐き出
される必殺の五・五六ミリ弾が、通行人も含め動く者
を殺戮していく。頭蓋骨を打ち抜かれ、脳味噌をまき
散らす者や膝から先を撃ち抜かれ腹這いになり逃げ
延びようとする者達の断末魔が交差していた。辺りに
は、空葉きょうが乱れ飛び、硝煙が発ち込めた。男達
は殺戮を楽しんでいた。五分と立たない内に彼ら以外、

動く者はいなくなった。彼らの近くには、近くのビルから出てきたところを撃たれた二人のOLが、瀕死の重傷を負い路上に横たわっていた。

「牝豚が二匹転がっているぜ。どうする？」

相棒の問いに対し、もうひとりの男が首を掻ききる真似をした。二人の男は、女達をうつ伏せにして、スカートを脱がせ、パンティを剥ぎ取った。

「処刑を開始する」

二人はガムを噛みながら、白く盛り上がった尻の膨らみに拳銃を向けて乱射した。女達の身体が小刻みに震え、鮮血が飛び散り、尻は挽肉のようになった。

破壊された乗用車の影に、一人の若いOLが逃げ遅れ、蹲り震えていた。男のひとりが、機関銃を構えな

がら近づき命令した。

「着ている物を全部脱げ！」

女は恐怖のあまり口が聞けず、震えるばかりだった。

「ちえっ。しようがないな」

機関銃を近くの路面に置き、女を仰向けして、衣服を戦闘用ナイフで引き裂き始めた。手際よく裸に剥いた。四肢が長く、なかなかの美人だった。豊かな乳房を持ち、抜けるような白い肌をしていた。閉じ合わされたむっちりとした太腿を押し開き、股間を覗き込んだ。若草を思わせる匂いがした。

鮮やかなサーモンピンクの膣が口を開けていた。尻の深い割れ目にこれもサーモンピンクのアヌスが生きづいていた。男は黄色く濁った目で女の性器をじっ

と見つめた。

「お前の貝を喰らってやろうか？ベイビー」

膣とアヌスに、交互にむしゃぶりつき、ががつと歯を立てた。若い女の愛液は素晴らしい味がした。

泣き叫び、命乞いをする女を腹這いさせ、白く盛り上がった尻の合間に巨大な男根を擦り付けた。そして、アヌスにいきなり挿入し、激しく腰を動かした。アヌスを引き裂かれる際、苦痛に満ちた絶叫が響きわたった。男は、しばらくして獣のような咆哮を上げ、放出した。





ぐったりと横たわりすすり泣きを続ける女に、四つん這いの姿勢をとらせた。コルトパイソン三五七マグナムを、裂傷のため出血しているアヌスにあて、引き金を絞った。女は路面に突っ伏し、一瞬全身を激しく痙攣させ動かなくなった。女の腹部から真っ赤な血がアスファルトの路面にじわじわと流れ広がっていった。

その頃、行内では、強盗団の中であた一人の女戦士が女子行員達をフロアの中央に集めた。十数名の中から容姿端麗と思われる女を選別していった。女の眼鏡にかなったのは三人だけだった。三人とも目鼻立ちがはっきりとしており体型も中肉中背で、グラマーな女

達だった。

「お前。お前だよ。ぼやっとしていないで服を脱ぐんだよ」

一人の胸倉を掴み、制服のスカートを力まかせに引っ張った。プチンという音がしてホックが外れ、その女の豊かな下半身が露になった。切れ端のような黒のパンティが卑わいな感じを引き立てていた。

「いい趣味してるじゃないか」

笑いながら女のパンティに手をかけて一気に引き裂いた。女は恐怖と羞恥心のためか、ぶるぶると震え、俯むいたまま顔を上げようとしなかった。股間の恥毛が柔らかさうだ。

「尻を見せな。早くしないか！」

女戦士は黙ったまま動こうとしない女の鳩尾に蹴りを入れた。まともに蹴りが入り女は腹を押さえ床にうつ伏せに倒れた。豊かな真白い尻がむき出しになった。

「世話をやかせるんじゃないよ。さあ、今度はカウンターの上で四つん這いになるんだ」

女戦士は、拳銃で女を威嚇し、カウンタの上に上がるように指示した。女は虚ろな表情で椅子を足場にしてカウンターに上がった。うつ伏せになった女の尻の合間に手を入れた。最初、膣に一差し指を入れた。締めまり具合を確認しているようだ。次にアヌスに一差し指を根本まで差し込み中をかき回した。女の身体が激

痛のためかビクンと跳ねた。女の口からさめざめとした嗚咽が流れた。女戦士は指を抜き、匂いを嗅いだ。

「いい女は、ウンチまでいい匂いだよ」

女戦士はその指を女の口に入れた。

「きれいにしておくれ」

女はカウンターの上で夢遊病者のように起きあがり女戦士の指をくわえた。空いた方の手で女の制服の上着をはぎ取りブラウスのボタンを外しにかかった。

ブラウスを脱がせ、ブラジャーに取りかかった。すぐに豊かな胸の膨らみが露になった。女の口から指を引き抜き、両肩を掴み仰向けに寝かせた。女戦士は糸もまとわぬ女を再びうつ伏せに横たえ、むき卵のようになすべすべの尻を両手で押し広げアヌスを舐り始

めた。行内に女のさめざめとした啜り泣きが漏れた。



今度は、カウンターの上で仰向けにして、覆い被さるようにして、唇を重ねた。

「もつと、股を開きな」

指を女の膣に入れかき回しながら、舌を吸い出ししやぶり始めた。女の舌に満足したのか、首筋を舐めあげ、次に乳首にむしやぶりついた。しゃぶりそして乳房に思いつ切り歯を立てた。

「ギャー！」

女の絶叫が行内に響いた。乳房には歯形がくつきりと刻まれ、血が滴り落ちた。女戦士は流れる血を口に含み味わうようにして飲み込んだ。ほんの一瞬、女は怨念のこもった目で女戦士を睨み付けた。

「何だよ。その目は？あたいに文句でもあるのかよ」

「……いえ。何でもありません」

女の口から蚊の泣くような声が漏れた。

「遅いんだよ」

女戦士は女をうつ伏せに寝かせ、真っ白い尻の膨らみを力任せに噛んだ。また女の口から絶叫が洩れた。

女は恐怖と苦痛のあまり小水を垂れ流していた。

女戦士は尻の膨らみから顔を放し、腰のホルスターから拳銃を引き抜いた。軍用拳銃ベレッタ M九二F

Sだ。口径九×十九ミリメートルを発射する高性能な自動拳銃だ。間髪を入れず女のアヌスに銃口をねじ込んだ。女はアヌスを引き裂かれるあまりの苦痛のためか、逆海老剃りになり長い手足をばたつかせた。

「あ・ば・よ」

冷たい笑みを浮かべながら引き金を引いた。「ダーン」という乾いた銃声が響き、女の身体がピクンと跳ねた。次に白目を剥き横たわった。フロアに大量の血が流れ、死の痙攣が全身に伝わっていった。女戦士は銃身を血塗れのアヌスから引き抜き、死の痙攣を続ける女の身体を右足でひっくり返した。胸に大きな射出口ができていた。アヌスから入った弾丸は腹部を通り、胸から抜けたらしい。

女戦士はゆっくりとした動作で残る二人の女に向き直った。女達は我先に制服と下着を脱ぎ捨て全裸になった。

「お前達は物わかりがいいね。きつと長生きできるよ」

女達の白い裸身が女戦士の視線を貫いた。

豊かな肢体の女に近付き、床に片膝をついて女の白い尻を抱き寄せ、膣口に吸い付いた。

「お前のマンコ汁は美味しいよ。もっと舐めてあげる

よ」

女は蒼白な表情で震えるばかりだった。女戦士の柔らかな舌が膣口に微妙な刺激を与えていた。



「次はカウンターに四つん這いになって、こっちに尻

を突き出すんだ。アタイが味わってあげるよ」

女二人はカウンターの上で四つん這いの姿勢になり女戦士に尻を向けた。

二人の女に近づき、尻に顔を近づけ匂いを嗅いだ。

真っ白くシミ一つ無い尻の双球に舌を這わせた。

「美味しいよ。何てきれいなケツなんだ。喰うのが

楽しみだね。脂がのって旨そうだよ」

女の肛門に舌尖を押し込んだ。女の白い裸身がビク

ンと跳ねた。

暫く尻の感触を味わった後に首謀格の男に視線を

向けた。

「少佐、今日の獲物は上物だ……」

少佐と呼ばれた男の視線は、フロアの隅に伏せ、震えていた客達に注がれていた。その中の一人は、はつと目を引くような色白の美人だった。肩まで伸ばしたセミロングヘアに、切れ長の大きな二重瞼、鼻筋のとおった女優でも通用するような顔立ちをしていた。

「チエツ！」

女戦士が舌を鳴らした。そして続けて、

「伍長。あそこで震えている女をここに連れてきな」

と言った。身長百七十センチ位でガツチリとした猪首の男が小走りで、その女に近づいた。男は両腕を女の腰に回し、抱き上げ軽々と肩に載せ上げた。尻を摩りながら、カウンターに近づき、仰向けに寝かせた。男は、花柄模様のワンピースに両手をかけ、一気に引き

裂いた。女の悲鳴が行内に響きわたった。それにはかまわず、ストッキングをむしり取り、せわしげにピンク色のブラジャーとパンティを紙のように引き裂いた。形のいい乳房が、露になった。閉じあわされた太股の付け根には柔らかかそうな恥毛がはみ出していた。

身長は百六十五センチ以上、胸も尻も豊かだった。肌は抜けるように白く尻は剥きタマゴのように滑らかだ。猪首の男は、女の太股を広げ、合間に顔を入れ舌で舐り始めた。ピチャピチャという音が聞こえてきた。女は顔を両手で覆い、すすり泣きの声を上げた。女戦士が、女の右乳房を右手でこね回した。

「メインドイツシュが決まったようだね」

少佐と呼ばれた男が大きく頷いた。

「若い男はいいのか？」

「待つて。今捜しているところなのよ」

女戦士が、行内を見回した。客達の中に二十代後半のサラリーマン風の男を見つけた。男は壁に凭れるようにして佇んでいた。強盗団と視線を合わせないためか、足下をじっと見つめていた。男は長身で、百八十五センチ近くあり、引き締まった体格をしていた。女戦士は男の前に立った。

「へえ。なかなかいい男じゃないか」

女戦士は男を見上げるようにして、独り言を言った。

「おい。お前。服を全部脱ぎな。早くしろ。アヌスを打ち抜かれないのか」

「助けて下さい」

女戦士は拳銃を腰のホルスターから引き抜き、男の喉元に突きつけ、トリガーに指をかけた。男は無言で、ぶるぶると震えながらズボンのベルトを外した。女戦士は苛立ちの表情を浮かべ、男のズボンに手をかけ一気に引き下ろし、チェックのトランクスをおろした。膝を付き、縮こまった男根を口に含んだ。男の尻に両腕を回し、勃起した男根を喉の奥まで飲み込んだ。顔を激しく前後に動かした。時折、ジュルジュルという、男根を吸う音が聞こえた。右手の人差し指を男のアヌスに深々と差し込み中をかき回した。左手は男の太股を這い回っていた。女戦士はその姿勢で数分間、口腔性交を行った。男は「うっ」と呻いて、女戦士の髪を鷲掴みにし、果てた。女戦士は一滴も漏らすまいと、

男根を強く吸引した。

「美味しかったわ」

女戦士は、手の甲で口元を拭いながら、男から離れた。男はへなへなとその場に座り込んだ。その時、行内の奥から、ジュラルミンのケースを積んだ台車を押す支店長の大隅と、強盗団の一人が現れた。

「十億あるぜ」

男の声は弾んでいた。少佐と呼ばれた男が右手をあげ、

「撤収する」

と言った。女戦士は、自分が陵辱した男に銃を突きつけ、立ち上がるように促した。そして立ち上がった男のネクタイを引っ張りながら表に出た。先ほどの猪首

の男が、カウンターの上で、震えていた女達二人を両肩にのせ、出口に向かった。少佐と呼ばれた男が、カウンターの上で仰向けに寝かされていた女に近づき抱き起こした。女の目をじっと見つめ唇を強引に奪った。そしてふらつく女の手を引いて出口に向かった。

第二章 真弓 へと続く